

「利用者が安心して利用できる鉄道の再生を求めるアピール」

私たち国鉄労働組合千葉地方本部は、利用者が安心して利用できる鉄道の再生を目指して、ホーム要員の配置、ワンマン運転の運行の取りやめ、無人駅の有人化を求めています。

8月に発生した小田急線車内での傷害事件をはじめとし、10月には京王線車内での傷害放火事件、11月には東京メトロ、JR京浜東北線、九州新幹線と鉄道列車内での無差別殺人未遂、列車破壊事件が連続して発生しています。日本の鉄道は1872年10月に「新橋駅～横浜駅」間が開業してから150年を迎えようとしています。この長きにわたる鉄道の歴史は「安全運行の確保」と「利用者が安心して利用できる安定輸送の確保」との闘いであつたといっても過言ではありません。誇り高き鉄道マンがその日々の安全運行を確保するため努力を惜しまず、磨き上げてきた技術と経験の集大成が世界に誇れる鉄道技術となっているのです。そして私たち国労も労働組合の立場で、その一翼を担い「鉄道の安全」を第一とし職場・地域で地道な歩みを進めてきました。そうした鉄道の安全に対する技術の進歩により、バリアフリー設備の拡充や列車衝突事故などを未然に防ぐための、さまざまな設備投資や規制、さらには基準の見直しといった対策が講じられ、日々の安全・安定輸送が保たれてきました。ところがこうした対策や基準の見直しでは一連のような事件を未然に防ぐ対策とは言えないことが、明白になってしまいました。

列車等における「テロリスト」による犯罪行為は、諸外国においても発生していますが、今回のような事件が日本でも起こってしまったという現実を顧みるとき、今までと同様の対策ですでに利用者の安全を守ることはできないと考えられます。今回、連続発生した事件においても乗務員のいる先頭車両や最後部車両での犯行ではなく、中間車両での犯行がありました。このような状況を見るとき、現在導入が進められている「ワンマン運転」の運行では、運転士一人で全ての安全確保を担わなければならない、緊急の対応や防犯対策の面からも極めて不十分かつ危険な体制だと言わざるを得ません。

事件の生々しいショッキングな映像を見た多くの利用者は、ホームに駅員がいれば速やかにホームドアを開扉して車両のドアを開け、スムーズな避難誘導ができたと感じたことでしょう。こうした犯罪行為がいつ起きるか判らないという現実があるだけに、ホーム要員を復活させ、速やかな対応ができる体制を早急に作ることが、社会インフラを担う鉄道会社としての責務であると私たちは考えています。

二度とあのような痛ましい悲惨な状況を発生させてはなりません。私たち国鉄労働組合千葉地方本部は、鉄道利用者の安全を最優先した対策として、ホーム要員の配置と車掌のいないワンマン運転の運行の取り止め、無人駅の有人化を強く求めています。

2021年11月20日

国鉄労働組合千葉地方本部
執行委員長 加藤 晃一